

永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』と その原典との比較考察

谷 口 彩 子, 亀 高 京 子*

(尚絅短期大学, *東京家政学院大学家政学部)

平成7年6月28日受理

Examination of the Translation of Haskell's "The Housekeeper's Encyclopedia" into "Keizaishogaku Kaseiyoshi" by Nagamine Hideki

Ayako TANIGUCHI and Kyoko KAMETAKA*

Shokei Junior College, Kumamoto 862

*Faculty of Home Economics, Tokyo Kaseigakuin University, Machida, Tokyo 194-02

The purpose of this paper is to clarify the original text of "Keizaishogaku Kaseiyoshi" translated by Nagamine Hideki and to compare the translation with the original text in detail so as to interpret how it was translated by Nagamine Hideki.

The results are as follows:

The original of "Keizaishogaku Kaseiyoshi" is Mrs. E. F. Haskell's "The Housekeeper's Encyclopedia" published in New York by D. Appleton & Co. in 1860. The original had 424 pages, and it included many areas of home life with descriptions about cooking making up more than 60%. Incorporated into "Keizaishogaku Kaseiyoshi" was no more than 40 pages or less than 10% of the original text. Abundantly translated are the chapters referring to nutrition, food, infancy, husbands, and preface. On the other hand, the original was translated less in the chapters on servants, housing, clothing, and remedies. This may be due to the translator's intention of choosing household ideologies and contents that were both desirable and practicable in early Meiji era as well as in view of the cultural differences between Japan and America of the time. It is understandable that the translator named his publication "Kaseiyoshi" (Yoshi meaning principal point).

(Received June 28, 1995)

Keywords: a translated book on home management 翻訳家政書, early Meiji era 明治初期, household ideology 家政理念, developmental history of home economics 家政学成立史, "Keizaishogaku Kaseiyoshi" 『経済小学 家政要旨』, Nagamine Hideki 永峯秀樹.

1. 緒 言

これまで、常見育男らを中心に、わが国における家政学成立史研究の一環として、江戸後期以降に出版された家政書（家事教科書・家政学書）を対象に、家政理念と家政学の発展に関する研究が進められてきている。そのなかでもとりわけ、明治初期における翻訳家政書は、近代国家への歩みを始めたわが国歴史上の転換期という社会背景のもとで、それまでの家事教育^{*1}に対して啓蒙的な役割を果たすとともに、その後の家政教育^{*2}・家政学研究に多大の影響を及ぼした出発点

とも考えられてきた。また、こうした翻訳家政書の理念や内容がどのように受容されてきたのかという経時的推移については、家政学に関する史的考察の上から意味深く受けとめられている^{1)~3)}。

これらの翻訳家政書については、漸次、その内容紹

*1 江戸時代から明治初頭の女子教育は、家事技術に関する内容に偏っていた。

*2 明治初期の翻訳家政書以降、家族の健康や幸福などを目的とし、計画性、合理性のある家政（家庭運営）へと移り変わっていった。

介ならびに考察がなされてきている。しかし、それらの原書名や原著者名については、これらを原語で明示してあるものがわずかに2冊にすぎず、またいずれか一方をカタカナで表示してあるものについても、その調査は困難で解明されていないものがほとんどである。こうした原書名等の判明しない訳書は、原典に忠実なものなのか、忠実な訳ではあるが一部を抄訳したものなのか、あるいは意識したものなのか、といった区別すら判然としない。

これまでに、原書や原著者および訳者について明らかにされ、さらに原書と訳書との比較研究が行われている翻訳家政書には、常見⁴⁾⁵⁾および石川⁶⁾によって、原典がアメリカの著名な女子教育者ピーチャーとストウ姉妹の共著になる“Principles of Domestic Science,” J. B. Ford & Co., New York (1870), 海老名晋訳『家事要法』(明治14(1881)年, 文部省刊)と、亀高⁷⁾により、原典が英国のビートン夫人Isabella Beetonの著である“The Book of Household Management,” Ward, Lock, and Co., London (1861)であることが解明された穂積清軒訳『家内心得草』(明治9(1876)年刊), 谷口⁸⁾⁹⁾によって、原典 W. Chambers and R. Chambers (ed.) “Chambers’s Information for the People,” J. B. Lippincott & Co., Philadelphia (1867)の最終編“Household Hints”との比較が行われた永田健助訳『百科全書 家事倭約訓』(明治7(1874)年, 文部省刊)を挙げることができる。

今回の研究で取り上げた『経済小学 家政要旨』(以下、『家政要旨』と略す)は、明治初期における翻訳家政書の中でも最も広く、小学校や女学校の教科書としても採用され^{*3}, 啓蒙的な役割を果たしたものとして特に著名である。その内容や考察については、家政学成立史研究の先駆者である常見育男¹⁷⁾によって、早くも戦前から紹介されてきたが、その原典については、同書の中に原著書名に関する記述がなされていないため、依然として不明のままであった。

さらに『家政要旨』は、その冒頭にも記されているように、翻訳者永峯秀樹によって原書の一部が「抄訳」されたものである。江戸時代末期の開国以来、欧米の

原書を翻訳した書物が出回るようになったが、これら当時の翻訳書の中には、原文を忠実に翻訳した結果、きわめて難解になった例も多い。そうしたなかでこの『家政要旨』は、欧米の生活様式、生活理念とは大きく異なっていた当時の日本人の生活の実状を考慮した適切な意識であったため、翻訳家政書の中でも最も普及したとみられてきた¹⁸⁾¹⁹⁾。しかし、これまで原典については不明であったため、原書との比較のもとに、翻訳者がどのような意図をもち、原書のどの部分を採択してどのように訳出したのかについては判然としなかった。この問題は、明治初期のわが国の家政理念が、翻訳家政書によって、欧米からどのような影響を受けたのかを考察するうえで、非常に重要な研究課題である。こうした視点から、筆者らは、明治初期における諸外国からの家政理念・家政思想の受容過程を明らかにするために、翻訳家政書の研究を進めている。

そこで本研究では、『家政要旨』の原典について解明し、ついで原典と訳書との比較・照合を通じて、翻訳者永峯秀樹が原書のどのような家政理念や内容を採択して訳出し、日本に紹介しようと試みたのかについて、考察を深めることを研究の目的としている。

2. 研究方法および資料

研究に用いた資料は、ハスケル原著、永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』(上・中・下, 3冊), 内藤伝右衛門, 山梨(明治9(1876)年刊), およびその原書資料として, Mrs. E. F. Haskell: The Housekeeper's Encyclopedia, D. Appleton & Co., New York (1872) (イリノイ州立大学図書館所蔵)である。

3. 結果と考察

(1) 『家政要旨』の体裁

同書の体裁と種類に関しては、すでに田中ちた子、田中初夫によって、すべて印刷・製本時が異なる2種類8部の紹介がなされている^{20)*4}。このうちもっとも刊行が早かったとされるものの体裁は次のとおりである。

半紙判、和紙木版刷和綴の上・中・下3冊本で、上

*3 常見¹⁰⁾, 岡村ら¹¹⁾¹²⁾, 二宮ら¹³⁾の調査研究によると、明治9年から14年頃にかけて、京都府女学校(明治9年)¹⁴⁾, 長崎県女児小学(同11年)¹⁵⁾, 山形県小学校(同14年)¹⁶⁾等全国の小学校や女学校で、同書を「読物」, 「経済学」, 「家事経済」などの科目で使用しており, 「家事倭約訓」と並んで使用頻度が高かった。

*4 これに筆者が1989(平成元)年7月から1990(平成2)年4月にかけて、国立国会図書館、東書文庫、東京家政学院大学附属図書館内家政学文献センター、お茶の水女子大学附属図書館などにおいて行った調査結果を合わせると、製本時を異にする和装本10種、洋装本3種の13種類がある。

永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』とその原典との比較考察

巻34丁（題字，緒言，目録各1丁，本文29丁，字書2丁），中巻35丁（本文33丁，字書2丁），下巻37丁（うち本文35丁，字書2丁）からなる。

表紙は，藍色，厚和紙で，左肩に題箋があり，「経済小学 家政要旨 永峰秀樹訳 上」（「経済小学」は角書）と記されている。

表見返しは白色で，緑色の印字がなされており，桜の匡郭のなかに，「米国ハスケル氏著，大日本永峰秀樹訳，経済小学 家政要旨，板権免許 明治九年八月十九日 内藤伝右衛門蔵板」（「経済小学」は角書）とある^{*5}。

上巻冒頭に綴じられた題字には，「玉匣 金鑒 七十三翁九岳 印印」と記されている。これは「ぎょっこうさんかん」と読み，「玉で飾った箱，貴重な教訓」という意味である。この題字を書いたのは，永峰秀樹の実父，小野通仙（蘭方医）であることから，『家政要旨』に対する期待や思い入れが酌みとれる。

奥付の刊記は

「版權 明治九年八月十九日
免許 同年十月出版 定価金五十五銭
静岡県士族
翻譯人 永峰秀樹
東京芝愛宕町三丁目壱番地寄留
山梨県平民
出版人 内藤伝右衛門
甲府常盤町三十八番地」

と記されている。

(2) 翻訳者 永峰秀樹について

『家政要旨』の翻訳にあたった永峰秀樹については，いくつかの研究書がみられるが，ここでは保坂忠信の著書による略歴を引用する²³⁾。

嘉永元（1848）年，山梨県北巨摩郡明野村浅尾新田の蘭方医小野通仙ととわの末子（3人の兄も蘭方医）として出生。甲府の徴典館に学び，19歳の時京都に遊学。高知，長崎に航し，江戸に出て士族永峰の名義上の後嗣となり，武士の身分を得た。幕末騒乱期に幕臣として活躍。その節を全うし，明治維新と共に静岡県に下った。徳川家設立の沼津兵学校に入り英語を学んだが，海軍立国に目覚め，明治4（1871）年，築地の官立海軍兵学校に入学，逆に数学教師として迎えられ，ここで英米人教師との交友の中に英学に専念した。本格的英学教師として江田島時代を通じて明治35（1902）年退官まで30年

^{*5} 永峰秀樹は，表紙，緒言，本文冒頭には「永峰」，奥付には「永峯」の字体を用いている。保坂²³⁾によると，「峯」は秀樹が用いた字体で，著書のほとんどにこの「峯」を用いている。ただし，現在の永峰家（秀樹の直系）は「峰」を用いているとあるので，「峰」は戸籍名で，「峯」は筆名と考えられる。

間，わが国草創期の海軍士官養成に努めた。彼は日本発行の最初の英和辞典，いわゆる「開成所辞書」を徹底的に活用した一人である。長兄小野 泉からと徴典館で学んだ漢文速読法の下地があったため，彼の英文読書力は抜群で島国日本の目を西欧の文明に開かせようと，豊富な漢語を駆使して，彼独自の文体をつくりつつ，翻訳者として開化期の明治20年代まで西欧文明移入の第一線に立った^{*6}。

退官後は書齋人としてフレノロジー（「性相学」）の研究を通して人生の探求に専念する一方，西欧文明の受容のあり方などにつき明治日本人を啓蒙し，今日の平和主義，民主主義の世界の姿を予見した。昭和2（1927）年12月，東京赤坂の自宅でこの世を去った。享年80歳。

保坂によれば，永峰は沼津兵学校で，パーレーの『万国歴史』，グッドリッチの『英国史』を読み，海軍立国でなければ日本は欧州人の奴隷となるだろうという気持ちに駆り立てられている²³⁾。また，世界のことを知らせることが，日本人の島国的独尊心をくじくことになり，一般人民の教化によいと考えて翻訳を行っている²⁴⁾。こうした翻訳に対する永峰の使命感は，『家政要旨』においても受けとめられる。また，訳文には，漢文の素地が生きており，リズムのある歯切れのよい文体となっている。

(3) 『家政要旨』の原典の解明

『家政要旨』の原典を解明するにあたって，まず同書の中に原書名，原著者名について，どのような記述があるのかを調査した。その結果，同書「緒言」の冒頭に，原典を示す次の記述がみられた。

「原書ハ一千八百七十五年米国新約克刊行「ハスケル」氏ノ著述ニ係リ一家ノ経済ヲ記載シテ彼邦居家必用ノ諸事ハ餘ス所ナシ」

ここでわかることは，原書が，「1875年にアメリカ，ニューヨークで刊行されたもの」で，原著者名は「ハスケル」，その内容は「家庭の経済」を記したものであるということである。

まず，明治初期の『版權書目』を調査した。これは，さきの体裁の項で記した奥付の刊記から，当時は出版を行う場合，内務省への届け出が必要であったからである²⁵⁾。このとき内務省が版權の許可を出した書籍の目録を作成したものが『版權書目』である。

これによると，『版權書目（第二号）』巻二の廿丁に『家政要旨』の書名，抄訳者名，出版人名に先立ち，

^{*6} 永峰は，「富国論」，「欧羅巴文明史」，「開卷驚奇 暴夜物語」，「改正 智氏家訓」，「代議政体」，「経済小学 家政要旨（後編）」など13種類の翻訳書を刊行しているが，その大半は，明治7～13年，永峰が26～32歳の時のものである。

表 1. 原典資料所在一覧

刊行年	"The National Union Catalog Pre-1954 Imprints" の記載事項	所 蔵 図 書 館
1861 年	Haskell, Mrs. E F The housekeeper's encyclopedia of useful information for the housekeeper in all branches of cooking and domestic economy: containing ... rules for putting up all kinds of ... fruits ... with tried receipts for making domestic wines, catsups ... New York, D.Appleton, 1861 xii, 445 pp. fold. plan. 21 cm	University of Kentucky, Lexington Harvard University, Cambridge Stanford University Libraries, Stanford New York Public Library, New York
1868 年	同 上	Washington & Lee University, Lexington
1870 年	同 上	University of Missouri at Kansas City, Kansas City
1872 年	Haskell, Mrs. E F The housekeeper's encyclopedia of useful information ... By Mrs. E. F. Haskell [New York, D. Appleton & Co., 1872 ?] xii, 445 pp. fold. plan. 20 cm T.-p. missing from patent office copy Running title: Housekeeper's encyclopedia 1.Domestic economy. 2.Cookery	U.S. Patent Office Library, Columbia University of Illinois, Urbana

"The National Union Catalog Pre-1954 Imprints" ²⁷⁾より作成。

原書について、次の記述が行われている。

「原 一千八百七十五年著
書 ハウスキーフルス、インサイクロペゲア
経済小学 家政要旨 大本三冊
抄訳者 永峯秀樹 静岡県土族
出版人 内藤伝右衛門 山梨県平民²⁶⁾」

この記述から、『家政要旨』の原典は、原著者名「ハスケル」、原書名「ハウスキーフルス、インサイクロペゲア」、アメリカ、ニューヨークにおいて、「1875年」に刊行されたものであろうという手がかりが得られた。

そこで、これらの手がかりをもとにして、原書を探す作業にとりかかった。ところが、アメリカにおいて1876年以降に刊行された著書については、アメリカの出版年鑑で調査可能であるが、1875年以前の出版年鑑は入手できなかった。そこで、現在、アメリカの図書館（議会図書館、公立図書館、各大学の付属図書館を含む）に所蔵されている文献をリストアップしてまとめた“The National Union Catalog Pre-1956 Imprints”²⁷⁾を用いて原典を探した。

その結果、この文献目録中のHASKELLの欄に、先の手がかりとはほぼ一致する原書名を見出すことができ

たが、それらは1861年、1868年、1870年、1872年刊行のもので、1875年に刊行されたものは見出せなかった（表1）。

そこで、表1に示された資料中、1875年という『家政要旨』緒言に記載された刊行年に最も近い1872年刊行本の原書コピーを、アメリカ、イリノイ州立大学図書館から取り寄せた。

(4) “The Housekeeper's Encyclopedia” の概要

入手できた原書資料は、B6判で、本文と索引部分を通したページ数445ページ^{*7}。題扉には次のように記載されている。

*7 原書のページ数の内訳は、題扉1枚（ページ数なし）、PREFACE(10ページ)、TABLES OF WEIGHTS, MEASURES, ETC. (2)、CONTENTS (4)、折り込み図1枚、INDEX (25)（本文とINDEXに通しのページ数がうってある）、巻末に出版社の広告(10)となっている。

永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』とその原典との比較考察

THE
HOUSEKEEPER'S ENCYCLOPEDIA
OF
USEFUL INFORMATION FOR THE HOUSEKEEPER
IN ALL BRANCHES OF
COOKING AND DOMESTIC ECONOMY:
CONTAINING
THE FIRST SCIENTIFIC AND RELIABLE
RULES FOR PUTTING UP ALL
KINDS OF HERMETICALLY-SEALED FRUITS,
WITH OR WITHOUT SUGAR,
IN TIN CANS COMMON BOTTLES:
ALSO
ROLES FOR PRESERVING FRUITS IN AMERICAN AND
FRENCH STYLES;
WITH
TRIED RECEIPTS FOR MAKING DOMESTIC
WINES, CATSUPS,
SYLUPS, CORDIALS, ETC.;
AND PRACTICAL DIRECTIONS
FOR THE CULTIVATION OF VEGETABLES, FRUITS,
AND FLOWERS, DESTRUCTION OF INSECTS, ETC., ETC.
BY
MRS. E. F. HASKELL.
NEW YORK:
D. APPLETON AND COMPANY,
549 & 551 BROADWAY.
1872.

原著者名「Mrs. E. F. Haskell」、原書名「The Housekeeper's Encyclopedia」、刊行社名「D. Appleton & Co.」で、「1872年」にニューヨークで刊行されたものである。刊行年を除けば、(2)で得られた原書に関する手がかりと一致している。さらに、この題扉の裏面には、当時、日本と同様アメリカにおいても、本を出版する場合届け出が必要であったらしく、「法令に従って、1860年に、D. アップルトン社より、ニューヨーク南区の合衆国地方裁判所事務局に届け出済み」であることが記載されている。このことから、同書初版が刊行されたのは1860年、またはその翌年の1861年であり、以後少なくとも1868年、1870年、1872年と数回にわたって再版が刊行されている。したがって、『家政要旨』緒言の記載に従えば、永峯秀樹が入手したのは、その再版本の一つ、1875年版であろうと推定される。

入手資料の題扉の記載から、原書は、主婦(housekeeper)を読者対象とし、料理(cooking)と家政(domestic economy)に関するあらゆる領域を内容としている。その中でも特に、果物の保存方法、ワインなどの家庭での製造方法を目玉としており、さらに、

家庭菜園のことにも触れている。

ところで、『家政要旨』緒言には、原書の内容について「一家ノ経済ヲ記載」したものであると記しているが、「一家ノ経済」とは、原書の題扉にみられる「domestic economy」という言葉を受けた表現と考えられる。19世紀から20世紀初頭にかけてのアメリカ家政思想の生成過程に関する、松下²⁸⁾、今井²⁹⁾、今井ら³⁰⁾の詳細な研究によれば、レイク・プラシッド会議以後、「home economics」という名称が家政学を意味する言葉として定着する以前には、家政を意味する語句としてこの「domestic economy」が用いられることが多かったと指摘されている。ところがこの「domestic economy」という言葉は、明治初期の翻訳家政書において、「家事経済」や「家内経済」などと直訳されている³¹⁾。また、広義の家政(衣食住生活、家族、家庭経営、保育、介護などの諸領域を包括する)と狭義の家政(広義の家政の一領域としての家庭経営や家庭経済)をとともに「家内経済」と訳しており、用語の混乱がみられる。ここで述べられた「一家ノ経済」が「domestic economy」をうけ、広義の家政を指していることは、原典の目次や内容からも明らかである。

また、筆者が先に調査した、翻訳家政書の第1号、永田健助訳『百科全書 家事儉約訓』の原典とのいくつかの共通点を見出すことができる。すなわち、その原典、「Chambers's Information for the People」は、読者対象を広くイギリス国民全般としており、主婦を読者対象とした「The Housekeeper's Encyclopedia」とは異なるものの、印刷技術の普及という社会背景のなかで、有用な知識・情報(useful information)を百科全書(encyclopedia)的に体系づけながら一般的に広く普及させるという、教育的な意図を目的として持っていたこと、その知識の中に、科学的(scientific)知識が導入されてきているという点をあげることができる。

『家政要旨』の原典「The Housekeeper's Encyclopedia」に関する先行研究は、今のところ見当たらない。レイク・プラシッド会議以前の19世紀中葉のアメリカにおいて、家政に関する領域に、生活に有用なものとして、科学的な裏付けをもった知識を導入しようとした1冊として位置づけられるものと思われる。

原著者のMrs. E. F. Haskellという人物については、序文の記述から、家事に堪能な既婚女性であることがわかる以外は、今のところ全く情報が得られていない。この原書の巻末にあるD. アップルトン社刊行の書籍

表2. 原典と『家政要旨』との目次の比較

"The Housekeeper's Encyclopedia"	ページ数	『経済小学 家政要旨』	ページ数
		緒言	2
PREFACE	4	第一章 総論	9
PART 1 ADVICE TO YOUNG HOUSEKEEPERS AND THEIR HOUSEHOLD	42	第二章 家屋家材ヲ購ヒ求ムル時ノ心得	1
CHAPT. 1 SELECTING HOUSE AND FURNITURE		第三章 雇人ノ取扱方	14
CHAPT. 2 SYSTEM AND MANAGEMENT OF SERVANTS		第四章 料理ノ経済	14
CHAPT. 3 ECONOMY IN COOKING WELL, CHEERFULNESS, ETC.		第五章 洗濯糊黐斗等	11
CHAPT. 4 WASHING, IRONING, STARCHING, ETC.		第六章 賓客ヲ待遇スル心得	9
CHAPT. 5 DIRECTIONS FOR ENTERTAINING VISITORS, ETC.		第七章 夫ノ心得	25
CHAPT. 6 TO HUSBANDS—EXCUSES FOR THE MISTAKES OF HOUSEKEEPERS		(第三章 雇人ノ取扱方)	
CHAPT. 7 ADVICE TO SERVANTS			
CHAPT. 8 CARVING			
PART 2 NUTRITION, ELEMENTS OF FOOD, ETC.	15	第八章 栄養ノ事	22
CHAPT. 1 NUTRITION		第九章 食物ノ心得	18
CHAPT. 2 ELEMENTS OF FOOD		第十章 食糧ヲ買フ時ノ心得	12
CHAPT. 3 MARKETING			
PART 3 GENERAL COOKERY	154	(PART 3~10 まで訳なし)	
1. SOUPS, GRAVIES, AND SAUCES. 2. FISH. 3. BEEF. 4. PORK.			
5. VENISON, VEAL, LAMB, AND MUTTON. 6. POULTRY AND GAME.			
7. VEGETABLES. 8. PUDDINGS AND DINNER DESSERTS.			
9. PASTRY AND PIES. 10. YEAST, BREAD, AND BISCUITS. 11. CAKES.			
12. CONFECTIONERIES, CREAMS, ETC. 13. TEA. 14. COFFEE AND CHOCOLATE			
PART 4 BREAKFAST DISHES, COLD DINNERS, ETC.	17		
1. BREAKFAST DISHES. 2. HASHES. 3. TO SELECT EGGS, PRESERVE, COOK, ETC.			
4. ECONOMY DISHES. 5. COLD DINNERS			
PART 5 FRUIT HERMETICALLY SEALED, PRESERVED, DRIED, COOKED, ETC.	43		
1. APPLES. 2. PEACHES. 3. PEARS AND QUINCES. 4. PLUMS.			
5. CHERRIES. 6. SMALL FRUITS			
PART 6 WINES, BRANDIES, VINEGARS, CORDIALS, ETC.	14		
1. WINES AND TABLE BEER. 2. FRUIT BRANDIES.			
3. FRUIT VINEGARS. 4. CORDIALS AND EXTRACTS			
PART 7 FLAVORED VINEGARS, PICKLES, MANGOES	20		
1. CATSUPS. 2. SALADS. 3. FLAVORED VINEGARS. 4. PICKLES AND MANGOES			
PART 8 GARDENING AND INSECTS	54		
1. KITCHEN GARDEN. 2. FRUIT GARDEN. 3. FLOWERS. 4. HOT-BEDS.			
5. INSECTS INJURIOUS TO THE GARDEN, AND TROUBLESOME TO HOUSEKEEPER			
PART 9 CURING MEATS, AND DAIRY WORK	7		
1. CURING MEATS. 2. MILK, BUTTER, AND CHEESE			
PART 10 CHAPT. 1 SPRING WORK FOR THE HOUSEKEEPER	4		
PART 11 SICK-ROOM, REMEDIES, INFANTS, COOKING FOR INVALIDS	27	第十一章 病室	9
CHAPT. 1 SICKROOM, WHAT IT SHOULD BE, ETC.		第十二章 家中薬方	10
CHAPT. 2 SIMPLE REMEDIES		第十三章 嬰兒ノ事ニ付テノ心得	23
CHAPT. 3 CARE OF INFANTS FROM BIRTH TO WEANING		第十四章 嬰兒輕傷ノ諸患	16
CHAPT. 4 COOKING FOR THE INVALID AND CONVALESCENT			
PART 12 MISCELLANEOUS	23		
ページ数 合計	424		195

総ページ数=424

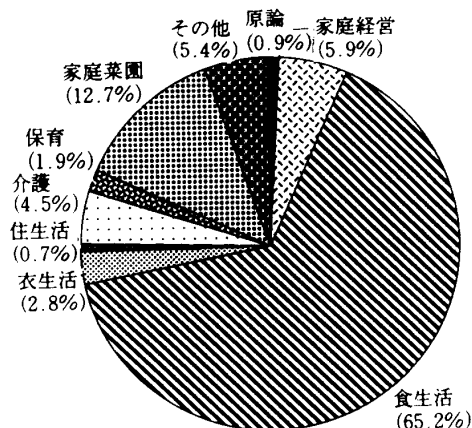


図1. 原典における領域のページ数比率

原書の記載内容に基づき、次のように分類を行った。原論：preface（家政の目標を明示しているため原論領域に分類した）。家庭経営：part 1-chapter 2, 3, 5~7, part 10。食生活：part 1-chapter 8, part 2~7, 9。衣生活：part 1-chapter 4。住生活：part 1-chapter 1。介護：part 11-chapter 1, 2, 4。保育：part 11-chapter 3。家庭菜園：part 8。その他：part 12。

目録やその他のアメリカの出版目録などを調査したが、この原書以外に、同一著者名による著書は見当たらなかった。おそらく、この『主婦百科』とでも訳される“The Housekeeper's Encyclopedia”が、彼女の唯一の刊行物ではなかったかと推察される。

原書の目次については、表2に示している。また図1から、食生活（料理法）に関する内容が原書の6割以上を占めていることがわかる。この点が、この原書の大きな特色である。

(5) 『家政要旨』と原典との内容構成の比較

『家政要旨』とその原典について、どのような領域がそれぞれどのくらいのページ数を占めているのかについて比較を行った。“The Housekeeper's Encyclopedia”の各領域ごとのページ割合（図1）は、『家政要旨』のそれ（図2）とは大きく異なっている。『家政要旨』の緒言に、「婦女教育ノ欠典ト思ヘル部類ヲ摘譯シテ」と述べられているように、翻訳者永峯が、原書のなかから必要性に応じて取捨選択して訳出した結果であると思われる。永峯秀樹が原書のどの部分を採択して翻訳を行ったのかについては、当時の家政教育に何が求められたのかを考察するためにも、検討する必要がある。

そこで、原書のどの章が『家政要旨』の各章に対応するのか、両者の比較・対照のために作成したのが表

総ページ数=195

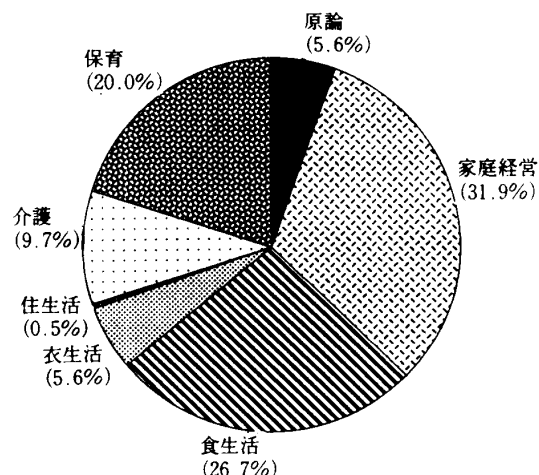


図2. 『家政要旨』における領域のページ数比較

領域は次のように分類した。原論：緒言、第1章。家庭経営：第3, 4, 6, 7章。食生活：第8~10章。衣生活：第5章。住生活：第2章。介護：第11・12章。保育：第13・14章。

2である。表2によると、『家政要旨』第1章は原書のpreface、同じく第2章から第7章までは原書part 1のchapter 1~chapter 7、第8章から第10章は原書part 2のchapter 1~3、第11章から第14章は原書part 11のchapter 1~3が相当していることがわかる。また、原書のpart 3~part 10、およびpart 12は全く訳出されていない。すなわち、『家政要旨』は、原書の緒言と本文12部58章424ページのうち、preface, part 1, part 2, part 11のわずか3部13章約40ページが抄訳されたものであった。

このように原書の1割にも満たない抄訳が行われた結果、『家政要旨』とその原典“The Housekeeper's Encyclopedia”とは、領域構成の異なる本となった。図1, 2に示したとおり、両者の領域のページ数比率を比較すると、『家政要旨』は、家庭経営領域、食生活領域、介護領域、保育領域の順に大きな割合を占めているのに対し、原典は、食生活領域が6割以上を占め、『家政要旨』に採択された家庭経営や介護などの領域はそれぞれ5%にも満たないという構成になった^{*)}。

このような構成は、亀高らが解明した翻訳家政書の一つ、穂積清軒訳『家内心得草』（明治9年）の訳出過程と共通している。すなわち、同書の原典は、イギリスの著名な料理書の祖として知られるイサベラ・ビートンによる“The Book of Household Management”で

あるが、この原書も料理法に関する記述が大半を占めており、穂積が訳出した「household management」に相当する部分は、1割にも満たないことが報告されている³²⁾。ここで、二人の翻訳者がともに、原書の大半を占める料理に関する内容よりも、家庭経営に関する領域を採択してわが国に紹介したという点が注目される。

(6) 『家政要旨』と原典との刊行趣旨の比較

原典の緒言 (preface) は、『家政要旨』第1章総論として抄訳されており、その内容の一部を知ることができる。この総論は、家族の幸福や安全や快適さは、料理や家庭経営を担当する主婦の手腕にかかっており、そのために女子教育の重要性を述べたものとして有名である。さらに、社会の変化に伴い生活活動内容も変化しており、食生活もそれに応じた内容が求められることが述べられているが、原書ではこれに続いて、そのために新しい有効な料理法や貯蔵法を記したとする、原著者ハスケルの刊行の意図が記されている。しかし、この原書 preface の最後の部分は訳出されず、原著者がその時代にあった新しい料理法を知らしめることを主眼の一つにおいていたという趣旨は、『家政要旨』には訳出されなかった。

一方、翻訳者永峯秀樹が翻訳の趣旨を記した『家政要旨』緒言の要旨には、

- I. ① 日本とアメリカでは家政の内容が著しく異なること。
- ② したがって、原書を全て訳しても、わが国では役に立たない部分が多いこと。
- ③ 今、日本人に最も必要と思われる内容。
- ④ 未だ誰も刊行していないもの。
- ⑤ しかもこれまでの女子教育に欠けていると思われる内容、を翻訳した。
- II. ⑥ 料理は重要な領域だが、西洋の料理法を今、翻訳しても役に立たず、また、永峯自身の

* 領域分類にあたっては、今日の家政学・家庭科教育の領域区分によった。緒言、総論は、家政の目標や原著者、翻訳者の家政(教育)観が示されているため原論領域に分類した。「料理ノ経済」は、主婦の心得や使用人の管理が主体で、食物、料理そのものに関する内容ではないため家庭経営領域に、「食糧ヲ買フ時ノ心得」は、食品鑑別法を主体としているため食生活領域に分類した。「家事全般」(原書 part 10)は家庭経営領域、「食品加工」(同 part 9)は食生活領域、その他(同 part 12)は特定の領域に分けることができないためその他と分類した。

任ではないと考え、翻訳を行わなかった。

と記してある。原書 preface の後半部分を訳出しなかったのは、⑥の理由によるものと推測される。

両者の刊行趣旨の違いからも、『家政要旨』翻訳の背後にある、日本とアメリカの生活習慣、文化、家政理念の相違が、当時いかに大きかったかが推し量られる。しかし何よりも永峯は、原著者ハスケルが preface で述べている家政のあり方の重要性を認識して、家族全員の健康・幸福・快適さの実現を目的とする家政のあり方の紹介を意図して、日米の違いを考慮しながら翻訳を行ったことがうかがわれる。

(7) 訳出章における訳出割合

『家政要旨』に訳出された原書の訳出章において、その全文が訳出されたのかについて、行数による調査を行った。その結果、永峯によって、さらに訳出文の選択が行われていることが判明した。

図3は、原書の訳出章の全行数に対する訳出行数の割合を示したものである。

これによると、part 2 の chapter 1 (図では 2-1 と略記) NUTRITION (栄養) の項目のみは、ほぼ全行が『家政要旨』(第八章 栄養ノ事)に訳出されているものの、その他の章は全文が訳出されているのではなく、その内容や領域によって訳出率に差がみられた。

訳出率が高かったのは、このほかに、2-2 FOOD (『家政要旨』第九章 食物ノ心得)、11-3 INFANT (『同』第十三章 嬰兒ノ事ニ付テノ心得、および、第十四章 嬰兒輕傷ノ諸患、の2章に分割して訳出されている)、1-6 HUSBAND (『同』第七章 夫ノ心得)を挙げることができ、いずれも9割以上の高い訳出率となっている。

逆に、訳出率が低かったのは、1-7 SERVANT (『同』第三章 雇人ノ取扱方 後半部)、1-1 HOUSE (『同』第二章 家屋家材ヲ購ヒ求ムル時ノ心得)、1-4 WASHING (『同』第五章 洗濯糊熨斗等)、1-2 SYSTEM (『同』第三章 雇人ノ取扱方 前半部)、11-2 REMEDY (『同』第十二章 家中薬方)などであり、いずれも3割以下の訳出率にすぎない。

そこで、こうした訳出率の差がなぜ生じたのかについてつぎに検討する。

(8) 永峯秀樹の訳文の特徴

『家政要旨』とその原典との比較・検討を行うために、筆者らはまず、訳出章の全文を翻訳した翻訳資料(B5判154ページ)を作成した。『家政要旨』と原文とを直接比較するのではなく、翻訳資料とも比較を行

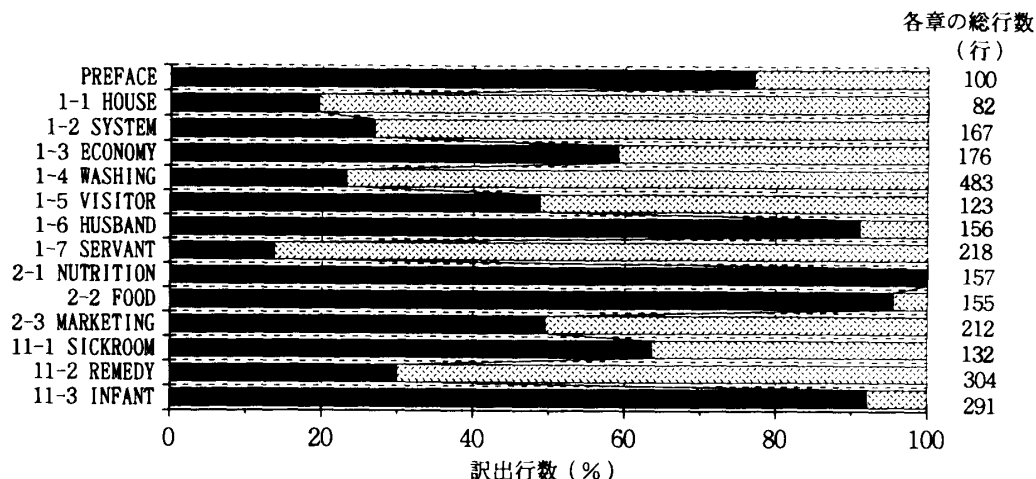


図3. 訳出章における訳出行数比率

■訳出行数, ▨訳されなかった行数.

うことで、より客観的に訳文の特徴を把握できるのではないかと考えたからである。そして『家政要旨』と原書との比較結果を記録して、比較対照資料（B5判181ページ）を作成した。その結果、永峯秀樹の訳文には次の五つのタイプが存在しており、『家政要旨』（訳書）のなかではそれらが混在していることがわかった。

1) 原文を直訳する

The acids give flavor to fruit; they are, the malic of the apple, citric of the lemon, tartaric of the grape. (原書 p. 49, ll. 1-3)

酸質ハ菓実ニ香氣ヲ与フル者ニテ林檎酸、仏手柑凍冰（引用者註：クエン酸のこと）、酒石酸ノ類是ナリ（訳書中巻29丁裏2～4行）

このような物質名が多い原文は、その物質名の訳し方（漢語またはカタカナ）に特徴がみられるが、原文どおり直訳されている。

2) 原文の意味を損なわない範囲で、読者にわかりやすく意識する。

...no greater praise could be spoken of a lady, than to say she was a perfect housekeeper; (原書 preface ll. 3-4)

婦人ノ善悪ハ重モニ所帯持ノ巧拙ニテ定メタレ共（訳書 1丁表5～6行）

原文を直訳するならば、「女性にとって、完璧な主婦であると言われる以上のすばらしいほめ言葉はなかった」ということになる。永峯の意識には、甲府の徴典館で学んだという漢文速読法の素地が生かされている。なぜなら、原文の要約かと思われるほど簡潔な訳文になっているからである。こうした意識調の訳文が『家

政要旨』の主体となっている。

3) 原文の一部が訳出されなかったもの（下線部）

...she can form its character at will; that is, always provided her influence is not interfered with (原書 p. 35, ll. 28-29)

其少児ノ性質ハ傳婢ノ好ム処ニ応シテ善惡トナルヘキナリ（訳書 12丁表8～同裏1行）

このように、原書の文章の一部が訳文に表れていない場合も多い。これは、永峯が原文の大意をつかんで意識するという方法によるためと考えられる。

4) 原文にない語句を加筆した部分

in the present generation, (原書 preface, ll. 3-4)

当今ハ文明モ進ミ来リタレハ婦人ノ役目モ次第ニ重クナリテ（訳書 1丁表6～7行）

「今の世代では」と訳すだけですむところ、下線部のような原文にはない挿入句が加筆されている。これは「the present generation」についての説明を、読者にわかりやすく記しているのであるが、こうした挿入句により、翻訳者の解釈や考え方が判読できる。すなわちここでは、「文明」という言葉から文明開化という言葉がもてはやされた明治初期の時代背景と、女性の役割が重要になってきているという翻訳者の女性観、女子教育観が反映されていると読むことができる。

こうした挿入句のなかには、日本人にはなじみの薄い物質名を説明するために、註を付す代わりにつけ加えられた語句もみられる。

5) 原文にない文章を加筆した部分

夫ハ外ニアリ勉業シテ家人を支給スルニ餘ルヘキノ金ヲ得ルモ其妻ハ内ニ在リテ萬事ニ浪費スレハ貧ナラサルヲ欲スルモ得ヘカラサルナリ（訳書 17丁裏8～18丁

表1行)

この部分は原文にはみられない。このほかにも読者である女子の注意を喚起するために挿入された文章が数カ所みられる。こうした原文にはない加筆された文章の存在により、『家政要旨』は純粋な翻訳書というより翻訳者による訳述書ともいべき性格が付されることになった。

(9) 『家政要旨』と原典との訳出内容の比較

1) 家庭経営領域

① 第3章は、上巻9丁裏1行までが、原書1-2 SYSTEM AND MANAGEMENT、同2行目以降が、1-7 ADVICE TO SERVANTSと、原書の異なる2章のなかから使用人の扱い方に関する内容を抽出して構成されている。

この章には、家事をできるだけ秩序立てて行うこと、使用人を守るべき規則を設けてこれに従わせること、ただそれだけではなく、主婦の使用人への心配りも重要であることが述べられている。さらに、主婦の心配りが使用人を道徳的幸福 (moral welfare) に導くというところで、日本人にはわかりにくい抽象的な概念と判断したためか、翻訳者は原文にない挿入文を用いて説明を行っている(6丁裏1~6行目)。このように、抽象的な概念が述べられることが多い家庭経営領域では、日本人にはなじまない概念・用語等を少しでもわかりやすく訳出するために、翻訳者による意識や説明文の挿入など、随所に訳出の工夫が見受けられる。

このほかに、永峯は、曜日を決めて家事を配分するアメリカ式の家事のやり方を紹介している。これはおそらく、この方法に、効率性、合理性、システム性、計画性などの優れた点を、認めたためと思われる。

一方、訳出されなかった内容は、テーブルセッティング、食器の洗い方、衣類整理法、および料理人、部屋係、洗濯係、雑用係等の使用人の職務内容についてである(唯一訳出されたのは「子守」の項目のみ)。

② 「子守」については全文訳出されているが、このことと保育領域の訳出率が高いことから、永峯が子育ての重要性を認識していたものと推察される。当時日本においても、子守として、経験も知識も未熟な幼い少女が雇われることは多かった。こうした慣習の問題点を指摘し、子守に求められる資質、子どもの発育状況を理解することの重要性など、原文どおりに訳出されている。

③ 第4章は、料理を担当する主婦の家計管理の方法について述べてある。すなわち、簡素な料理でも、

食卓に上手にセッティングされれば、そうでない場合よりおいしく食べることができるし、主婦の陽気な顔が食卓に添えられると、暗い雰囲気から開放され、家族(特に仕事から帰った夫)の疲れが癒されることや、部屋がきちんと整理されていることも、食事をおいしく頂くには重要なことだと述べられている。それまでの家風や伝統といった形式のみを重視するわが国の家政理念の中で、家族の幸福の実現という目的を前面に押し出した家政観は、永峯ならずとも新鮮に思われたのではあるまいか。さらに、儉約に走るあまり、古くなった食物を家族に食べさせてはならないというように、家族の幸福の実現にむけて、金銭面だけでなく、快適さ、健康という目標を導入している点も新しい内容である。

一方、『家政要旨』では、主婦が使用人を管理する場合の注意事項として、肉や野菜の捨て方など10項目を挙げている(上巻16丁6行~同17丁表6行)が、原文では85項目が挙げられている。また、原文には、「希望にあふれた妻は、あらゆる男が必要とする勇気を与えることができる」という意味の一文がみられるが、男女観の相違のためか、この原文は訳出されなかった。

概して、この章も概念的内容を含むため、翻訳者による挿入文や意識が多くみられる。たとえば、原文では「陽気な性質の婦人は(そうでない女性より)完全な家政担当者である」というところを、さらに詳しく、「万事巧者」で「家内和楽」にし、「世間で讃えられる母妻となる」といささか良妻賢母的理念を反映させながら説明しているなどである(訳書 上巻14丁裏10行~同15丁表3行)。

また、従来の経験とコツ(の記憶)に頼った家政のあり方から、記録をとり自分の方法を客観的に把握することによって、よりよい生活の実現を図っていくとする家政管理学の萌芽的記述も訳出されている。

④ 第6章では、冒頭において、お客をもてなす場合に、主婦の力量(resources)とその状況(circumstances)を配慮すべきであると述べている。

この章で訳出省略されたのは、お客を迎えた時のテーブルセッティング、晚餐会、紹介の仕方などである。

また、日本人は来客を迎える時、「何のお構いもできませんが」、「お口に合わないかもしれませんが」とへりくだって謝す習慣がある。原文では、たとえお客を招いた時、準備が不完全であっても弁解するのではなく、それに満足しているように振る舞うのがよいと

されている。永峯はその原文の訳出に加えて、日本式の「粗食をわびる」習慣を加筆している。

⑤ 第7章で夫の心得として訳出した点は『家政要旨』の特徴である。内容は、家政を遂行する妻に対する夫の理解と配慮の必要性を述べたもので、家庭生活における「男女（夫と妻）の協力」が重要であることに言及している。

この章が書かれた意図は、『家政要旨』には「家内ヲシテ和楽ナラシムル」ためと記されているだけであるが、原書には「家族一人一人の幸福（happiness）と快適さ（comfort）を確実なものにする」ためであると、目的が明確に述べられている。家族の幸福には、主婦のみでなく、家族員相互の協力が不可欠なのというまでもない。この章には「時間厳守」、「とがめだて」、「伴侶の選び方」、「理想的な妻の育成」、「夫の整理整頓」、「マナー」、「妻への気配り」などが述べられている。

さらに、結婚前の生活と結婚後の生活が異なるために、妻が健康を害することもあることに触れ、原文には妻の労苦を和らげる役割が夫に課せられていると述べているところを、永峯は当時のわが国の「嫁」の実態に配慮して訳している（中巻9丁裏3行～同10丁表2行）。これは、当時の日本の女子教育が、婚家先の家風にいかに順応していくかということに大きな関心が払われていたためである。夫婦がお互いにいたわり合うという夫婦関係・伴侶性（companionship）は、この時代に出現した時代潮流であるが、これに関する記述を訳出して家政書に記したことは、当時として画期的である。

さらに、妻の家事労働は、家族の労働活動に左右されること、時間調整を行う場合、主婦の睡眠時間の短縮等へ及ぶという記述があるが、これらは今日の「家庭管理学」でも扱われているような記述と考えられる。また、時間のもつ本質的価値が、夫も妻も平等に貴重なものであると述べている点にも着目される。

概してこの章は、これまでの家庭経営領域の章の中で訳出省略された原文が最も少なく、原文に最も忠実に訳されている。省略された内容は、夫が当然注意すべき「清潔感の欠如」に関する内容である。

2) 食生活領域

第8章の栄養に関する章では、体内に摂取された食物の変化の過程や、酸素が人間の体内で及ぼす影響など、原文がきわめて科学的で物質を主とする内容であるため、訳文も科学的で原文に忠実に訳出されている。

一部、用語・物質名の説明を行うための挿入文がみられるが、訳出率はほぼ100%である。栄養・食品・調理等の科学が未発達であった当時、栄養に関する記述が行われているところは科学的知識の導入という点で評価される。内容的にはまだ未熟であるが、家族の栄養を考える場合、家族員一人一人の職業、年齢、体格、健康状態に応じた食物を選択することが必要であると述べられており、個人差を考慮した栄養指導へ向かっているという点で、かなり進んだ内容であると着目される。さらに、栄養成分に関する知識が欠如しているために、栄養的に非常に高い価値を含んでいる部分が調理の際に廃棄されたり、異なる種類の食品を食べているつもりが、実際は栄養的に同じ成分を含む食品を繰り返し食べていることもよくあると指摘しており、栄養的知識を身につける必要性を述べている。

第9章も、人間の身体成分と食品成分とをそれらの構成元素について説明している科学的内容である。また本章には、わが国初とみられる食品成分表が掲載されている。この食品成分表は、今日のものに比べると、分析項目が重量と熱量のみであり、分析された食品数も29品目と少ない。一部原書と異なる数値が記載されていたり、日本では一般的でなかった野菜の記述が省略されていたりするが、この章の訳出率も高い。

第10章は食品の購入方法に関するもので、今日の食品鑑別法にあたる。肉の種類、魚の種類に従って、食品の鑑別法を述べている。訳出が省略された食品名は、ヤマウズラやカワカマスなど珍しい鳥類・魚類や洋野菜、粉類、コーヒー、紅茶、米などである。

3) 介護・保育領域

第11章では、病人の快適さという立場に立った病室の環境、備えるべき家具、病室訪問の際に気をつけること、介護人の心得、看護婦に求められる資質などについて記されている。省略された内容は、便利なベッド、看護婦の職務としての行水、医者に従うこと、薬の飲ませ方などである。

第12章の「薬」に関する章は、火傷や切り傷、しもやけの薬、傷の洗い方、赤痢の治療法、歯痛薬、止血法などについてである。薬剤に関する専門的内容を含んでいるためか、特別な薬剤の製法等については省略されている。

ここでは、原文では英米式の単位で記された薬剤を調査する場合の原料の分量を、日本の尺貫法に換算し直している。このことも訳出上の工夫とみてとれる。

保育に関する領域は、原書の11-3 INFANTSである

が、永峯は、子どもの保育全般に関する内容（第13章）と子どもの病気の治療法（第14章）の2章に分けて訳出している。訳出率がきわめて高いことから、この領域に対する永峯の関心の高さが伺われる。

第13章は、子どもの出生直後の、産湯、産着、母乳の与え方、子どもの発育における運動の重要性、子どもの立場に立った規則正しいしつけ方、母親の子どもに及ぼす影響などについて記されている。子育ての方法やしつけ方は日米で異なっていたと思われるが、原書に忠実に翻訳している。

この章には、永峯による挿入文に、翻訳者の子育て観を反映したものがみられる。たとえば、母乳の代用食を説明するところで、永峯は「子どもには母乳の他の食物は与えるべきではないが、母乳が不足するときには」これら代用食を与える、と述べており（下巻19丁表8行～同10行）、母乳の重要性を認識した記述である。また、他の子どもに比べて自分の子どもの歩き始めの時期が遅いからといって、無理強いをするのは子どもに害があるという内容もつけ加えている（下巻25丁裏8行～同10行）。これは、子どもの個人差に対する認識として着目できる。さらに、原文では母親のみを指していると思われる語を、「父母」と訳している箇所がいくつかみられた。これは、子育ては母親だけが行うものではないという翻訳者の認識を表すものと考えられる。

第14章も、子どもの病気に効く薬の調合法を、原文に忠実に訳している。ここでは、第12章の「家中薬方」の訳出率が低いのは対照的に、訳出率が高くなっている。原書に記された子どもの薬の調合に用いられる物質は、当時の日本人が容易に入手できるようなものばかりではない。このような内容をあえて訳出したのは、乳幼児死亡率の高かった当時の実状から、関心の高さが伺われる。

4) 住・衣生活領域

第2章では、家屋を選ぶ場合には、家族の人数に応じた適切な広さのものを選ぶこと、家具を選ぶ場合には、予算をあらかじめ設定し、その範囲内でリストを作成して購入すること、購入しすぎて部屋の中が混乱することがないように配慮しなければならないことなどが述べられている。

『家政要旨』の訳文に、「家道ノ貧富ヲ考へ」て家具を選ぶこと、という表現があるが、原文にはこれに相当する語句が見当たらない。これは、江戸時代からの「身分相応の暮らし」という考え方を受けた表現とみ

てとれる。

訳出省略された内容は、アメリカ家屋における廊下と部屋の配置、水の便、家具や台所用品に関するものである。

第5章では、洗濯の手順について述べている。原文では、「月曜日に洗濯をする時は、土曜日の晩に衣類を洗濯液に浸しておく」と述べているが、訳文は「洗濯を行う日の前々日に洗濯液に浸す」という表現をとっている。これは、まだ日曜日を休息日とする七曜制がなじんでいなかったためと、曜日を決めて家事を行うという風習がなかったためであろう。

また、洗濯の溶剤等の分量を計測して行うという方法や、「青みをつける」（今日の蛍光増白剤であろう）方法を、翻訳者は原文に即してほぼ忠実に訳している。

原文には、布地、労力、時間、石けんを浪費せずにする洗濯の仕方が、原著者ハスケルの経験に即して述べられている。

一方、訳出省略されたのは、衣類の折りたたみ方とアイロンのかけ方などである。これらは、衣服の種類が当時の日本人の衣服と異なっていたため、実際に役立つ機会が少ないためであろう。さらに、原文では、布地の種類や色、材質にわけて、詳細な洗濯法が記されているが、それらについても多くが省略されている。訳出された布地の種類は、フランネル、刺繍品、絹布、毛布などわずかである。

(10) 翻訳者永峯秀樹の『家政要旨』刊行の意図と特長

以上のことから、翻訳者永峯秀樹の本書刊行の意図と、これに基づいて原典から採択し、訳出した内容についてまとめると、以下のとおりとなる。

① 新しい時代には、その時代に対応した家政の知識が必要なのだと述べた有名な「吾等カ祖母ノ時代ニハ…」で始まる『家政要旨』第一章 総論は、原書のprefaceに相当する。それを第一章 総論として訳出したのは、明治初期という一大転換期という社会背景のもとで、時代の変化に対応した新しい家政のあり方を訳出・刊行しようとした意図によるものと考察する。

② 『家政要旨』緒言に記された翻訳の意図から、翻訳者永峯秀樹が、家政の重要性を認識していたことがわかる。

③ 家族一人一人の幸福と快適さと健康の実現を目的とする家政理念に最も注目し、全文の基底としている（永峯は、familyに「家族」、「家属」の訳語を用いている）。

永峯秀樹抄訳『経済小学 家政要旨』とその原典との比較考察

④ 日米における家庭生活文化・家政理念の違いを考慮・斟酌しながら、読者にわかりやすい訳文とするための配慮がみられる。そのため、訳文は意識や説明文の挿入などが随所にみられる。

⑤ 保育領域の重視―訳出率の高さやその訳文などから、子育てに関する内容を重要視していたことが伺われる。

⑥ 衣食住生活領域では、日米の生活文化の違いが濃厚に反映される、住居、衣服、料理等の生活様式に関する内容の訳出省略が多い。

⑦ しかし、上記の領域のなかでも、栄養、食品成分などの科学的な記述内容については、積極的に採用・訳出している。

⑧ 日米の生活文化の違いを超越する科学性、合理性、効率性、システム性、計画性などの優れた家政内容については、積極的に訳出している。

⑨ 『家政要旨』が日本の女子教育の中で用いられることを想定し、実生活への応用が利く内容を訳出している。したがって、あまりにも実生活とかけ離れた欧米の家庭生活についてそのまま訳出しても、実際問題として役には立たないと考えたものと推察される。

⑩ どのように変化の激しい時期であっても、日本人の生活構造は、早急には変化しないという生活観が伺われる。

⑪ 江戸時代から続く男尊女卑の慣習に対して、男女の本質的平等という立場に立って書かれている「夫の心得」という章を訳出している。

4. 要 約

『家政要旨』の原典解明と、原書と訳書との比較・照合を通して、翻訳者永峯秀樹が原書のどのような内容を採択して訳出したのかについて検討を行った。

その結果、原典は、Mrs. E. F. Haskell: The House-keeper's Encyclopedia, D. Appleton & Co. であり、当時のアメリカ人主婦に求められた家庭生活全般に関する知識について執筆されたものである。その内容は、衣食住生活、家族、使用人の管理法、薬の処方、看護、家庭菜園など多岐にわたっており、特に食生活（調理法）に関する記述が6割以上を占めている。しかし、『家政要旨』に訳出されたのは、原書の緒言と本文424ページのうち1割程度の約40ページにすぎない。さらに、訳出章の全文が訳出されているのではなく、永峯による選択が行われていた。訳出章における訳出行数でみた訳出率は、栄養、食品、幼児、夫の心得、

総論で高く、使用人の使い方、住居、被服管理、薬の製法などが低かった。これはまた、永峯の訳文は、大半において、原文の意味を損なわないという点では原典に忠実に訳されている。しかし、その訳文は、直訳調のものもあるが、漢文速読法の素地を生かした意識を主体としている。

特筆すべき第一は、当時のわが国における伝統的な「家」を第一義とする家政理念に対して、家族の健康・幸福の実現を目的（人間尊重を中核）とする家政理念を紹介しようとした観点と意図である。この理念を基底として、日米の生活文化の違いを考慮しながら、わが国に必要と考える領域内容のみを選択・訳出したこと、訳書名を『家政要旨』としたことが理解される。

第二は、現実の生活への実践が求められる家政教育においては、日本の家政や女子教育に欠けているもの、日本が外国に学ぶべきあるいは外国から導入すべきことは何であるのかという検討が求められる。次に、その中でも、何が実践可能かを検討する段階が必要である。永峯の訳文は「原典に忠実な」直訳的翻訳書としては、原文にない箇所を加筆するなど、逸脱している箇所もみられるが、この1冊で「外国の家政の紹介」と「日本が学ぶべき内容の検討」という二つのステップを併せて行っている点が優れたところであると考えられる。この点が原典に忠実な直訳的翻訳家政書『家事儉約訓』と『家政要旨』との違いであり、以後の家政教育への影響という点でも両者が異なる一因と考える。

原書資料を入手するにあたって、大変お世話になったイリノイ州立大学に留学中の脇田聡美さんに、深謝いたします。本研究は、文部省平成6年度科学研究費に基づくものである。なお、本研究の一部は、(社)日本家政学会第47回大会において発表した。

引 用 文 献

- 1) 常見育男：家政学成立史，光生館，東京，15（1971）
- 2) 亀高京子，三東純子，熊田知恵，板谷麗子：東京家政学院大紀要，**18**，1～53（1978）
- 3) また，家庭科教育史（学校教育）の立場から，二宮喜美恵，武井洋子：東京学芸大紀要，第6部門，**31**，89～109（1979）
- 4) 常見育男：家政学・家政科の背後にある歴史性調査の小論文集，常盤学園，太田，19～31（1984）
- 5) 常見育男：最初の家政学書・海老名晋訳『家事要法』の訳者海老名晋と訳書『家事要法』（明治14年文部省刊）ならびに，原著者「カザリン・ビーチャー」Catherine Beecherと原典「プリンシプル・オブ・ド

- メスティック・サイエンス」Principles of Domestic Science についての調査, 常見育男, 太田, 1~63 (1988)
- 6) 石川寛子: 原論報, **18**, 20~24 (1984)
 - 7) 亀高京子, 犬尾智穂子: 原論報, **20**, 20~24 (1986)
 - 8) 谷口彩子: 家政誌, **42**, 103~110 (1991)
 - 9) 谷口彩子: 家庭経営学論集, **1**, 25~40 (1991)
 - 10) 常見育男: 家庭科教育史, 光生館, 東京, 135, 136, 169, 170, 171 (1959)
 - 11) 岡村喜美, 原田富士子, 亀岬嘉子: 家教誌, **9**, 29~43 (1968)
 - 12) 岡村喜美, 武井洋子: 家教誌, **11**, 1~9 (1970)
 - 13) 二宮喜美恵, 武井洋子: 東京学芸大紀要, 第6部門, **31**, 99 (1979)
 - 14) 文部省: 文部省第四年報, 181 (1876)
 - 15) 文部省: 文部省日誌, 明治11年第3号, 18 (1878)
 - 16) 文部省: 文部省日誌, 明治14年第33号, 25 (1881)
 - 17) 常見育男: 日本家事教育発達史, 創文社, 東京, 80~81 (1938)
 - 18) 常見育男: 家政学成立史, 光生館, 東京, 169 (1971)
 - 19) 亀高京子, 三東純子, 熊田知恵, 板谷麗子: 東京家政学院大紀要, **18**, 52 (1978)
 - 20) 田中ちた子, 田中初夫 (編): 家政学文献集成 明治期Ⅱ, 解説, 渡辺書店, 東京, 1~6 (1966)
 - 21) 保坂忠信: 評伝 永峯秀樹, リーベル出版, 東京, 5 (1990)
 - 22) 保坂忠信: 評伝 永峯秀樹, リーベル出版, 東京 11~12 (1990)
 - 23) 保坂忠信: 評伝 永峯秀樹, リーベル出版, 東京, 67 (1990)
 - 24) 保坂忠信: 評伝 永峯秀樹, リーベル出版, 東京, 71 (1990)
 - 25) 朝倉治彦 (監修): 日本書籍分類目録, 明治篇別巻, 日本図書センター, 東京, 3~9 (1988)
 - 26) 朝倉治彦 (監修): 日本書籍分類総目録, 第1巻, 日本図書センター, 東京, 115 (1987)
 - 27) American Library Association (ed.): The National Union Catalog Pre-1956 Imprints, Vol. 234, Mansell, London, 92~93 (1972)
 - 28) 松下英夫: ホーム・エコノミックス思想の生成と発展, 同文書院, 東京, 60, 61, 65, 83, 84, 105, 156, 272 (1976)
 - 29) 今井光映: アメリカ家政学前史, 光生館, 東京, 125 (1992)
 - 30) 今井光映, 紀 嘉子: アメリカ家政学史, 光生館, 東京, 60~61 (1990)
 - 31) 亀高京子, 仙波千代: 家政学原論, 光生館, 東京, 26 (1981)
 - 32) 亀高京子, 犬尾智穂子: 原論報, **20**, 22 (1986)